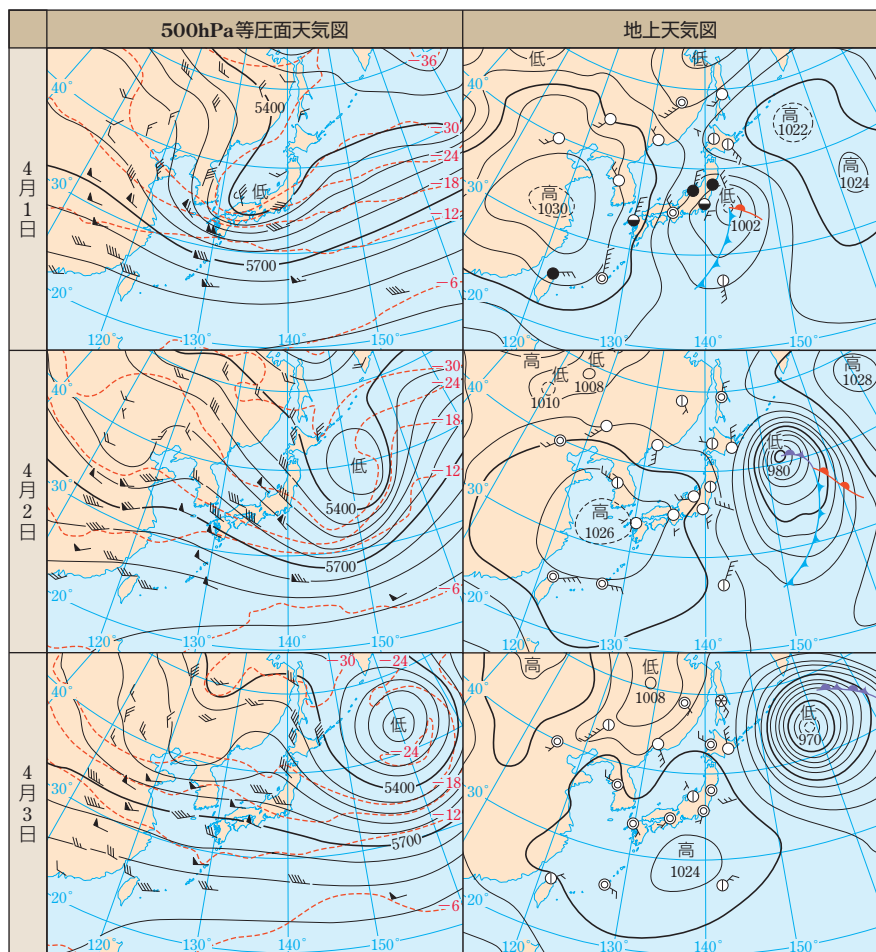


偏西風波動の東への移動に伴って、日本付近を低気圧と高気圧が交互に通過するようになる。温帯低気圧と温帯低気圧の間の高気圧を**移動性高気圧**とよぶ。移動性高気圧が日本を覆うと風が弱く、さわやかな天気になる。移動性高気圧の北東半分は乾燥し気温は低く晴天になるが、南西半分は曇りがちで天気が崩れやすい。移動性高気圧の通過後は天気は下り坂になる。この期間は3～7日ぐらいの周期で天気に変化することが多い。温帯低気圧は、上空の偏西風波動の気圧の谷が西にあるときに発達することが多い(→ p.255)。



▲図 27 偏西風波動の気圧の谷と温帯低気圧の発達(2009 年 4 月 1 日～ 3 日 21 時)

## C 梅雨前線と オホーツク海高気圧

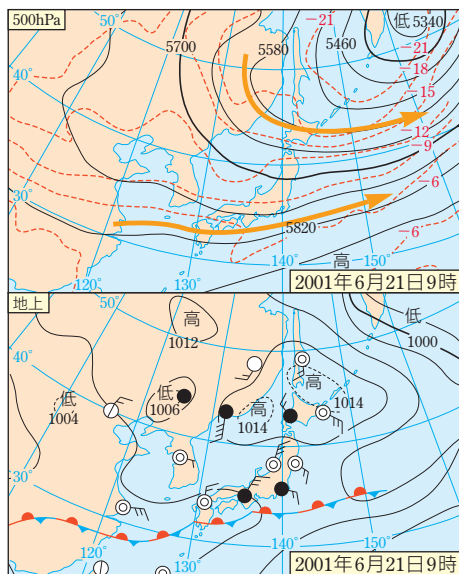
日本付近では6月中旬から約1か月間、曇りや雨の日が続くことが多い。これを、**梅雨**とよんでいる。これは東アジア地域に現れる停滞前線(**梅雨前線**)に伴う雨である。

●**梅雨前線**● インドおよび東南アジアに固有の雨季は、インド洋から大陸に吹く高温多湿の季節風、すなわち夏のモンスーンによるものである。これに対して、梅雨は中緯度に東西に長く延びる前

線の停滞による雨季である。図28に梅雨期の天気図を示す。オホーツク海と太平洋に高気圧があり、この2つの高気圧の間に、東西に延びる梅雨前線が停滞している。日本付近においては、梅雨前線はオホーツク海高気圧と北太平洋高気圧という性質の違う2つの気団の境界付近にできる。北太平洋高気圧は、太平洋の亜熱帯高压帯の西端である。

フィリピン方面から北太平洋高気圧の西縁を回り込むように梅雨前線の南西側に流れ込む、西から東に舌状に伸びる多湿の気流(<sup>しつぜつ</sup>湿舌)によって、梅雨末期には大雨や集中豪雨が生じることがある。

●**オホーツク海高気圧**● 梅雨の時期には、ジェット気流がヒマラヤ・チベット山塊のために2本の流れに分かれ、1本は日本上空、1本はオホーツク海の北方を大きく蛇行するようになる。その結果、2本のジェット気流にはさまれたオホーツク海上空で空気がよどみ、オホーツク海高気圧が形成される。オホーツク海高気圧のように、ジェット気流の分流や大きな蛇行によって、空気が停滞することで形成される高気圧を**ブロッキング高気圧**<sup>a)</sup>という。



▲図28 梅雨期の500 hPa等圧面天気図と地上天気図 →は強風軸。

a) blocking high

5

10



れい か

## 15

20

20

